

# ハウスシェア型混住寮としての「先魁」

## “Sakigake” – A House Share Type Dormitory for International and Japanese Students

金沢大学国際学類 志村 恵

SHIMURA Megumi

(School of International Studies, Kanazawa University)

キーワード：混住、ハウスシェア、BT0、外国人留学生宿舎

### 0. はじめに

よく言われるように、留学生との交流は、おおまかに分けて以下の4つのレベルからなるとされる。第一に授業や研究室における交流、第二に学内におけるたとえば学生交流団体やサークル・クラブ活動における交流、第三に地域の交流団体や自治会あるいは自治体などによるイベント等を通じた交流、そして第四に寮や住居における日常生活を通じた交流である。

2012年10月から運用を開始した金沢大学の学生留学生宿舎「先魁」は、主にこの日常生活の中での交流を通じた学生の国際化を目指して建てられたハウスシェア型の混住寮・教育寮である。もちろん、ここで言う「国際化」とは、改めて指摘するまでもなく、日本人学生および留学生の両者に対しての「国際化」である。留学生も日本人学生同様、日本人学生や他の留学生との交流を通じて、多様な価値観・多文化に触れ、「国際化」していくべきだからである。

報告者は、留学生センター長および学生支援担当学長補佐として留学生と日本人学生双方のサポートを行いながら、「先魁」の企画、建設、運営に一貫して関わってきたので、以下、「先魁」建設に至るまでの経緯や基本的考え方、さらには現在の運用の在り方などについて報告したい。

### 1. 「先魁」の立案・建設

「先魁」設置以前、金沢大学には留学生用の宿舎として「国際交流会館」（定員79名、1994年運用開始）があった。また、石川県と日本学生支援機構が運営していた「石川県国際交流会館・石川県留学生交流会館」（定員108名）もあった。しかし、国の留学生増大政策や本学の交流協定校の増加などにより、留学生用宿舎の大幅な定員増が必要となった。一方、一般学生を対象とした学生寮も三寮あ

るが（総定員数 622 名）、老朽化が激しく、また「自治寮」という特殊な文化もあり、近年入居率が思わしくなく、抜本的な対策が必要とされていた。

金沢大学は、1984 年から角間地区に新キャンパスを作り、順次移転してきたが、1997 年 3 月の基本計画には寮の移転も盛り込まれていた。そこで、2003 年に国際交流ゾーンの整備に関するワーキンググループが作られ、混住型の寮が提案された。しかし、諸般の事情からその当時は移転・建設には至らなかった。

そうしたなか、大学の国際化・留学生増大政策も相まって、2008 年、学生居住施設構想策定ワーキングチーム（座長は報告者）が学生部内に設置され、留学生を含めた学生用宿舎の移転・建設に向けての議論が本格化した。同チームでは、早急に報告書を出すべく、設置場所、形態、規模などについて調査を進めた。報告者は、自分自身のドイツ留学の経験に基づき、当初から、ハウスシェア型（ドイツで言う WG: Wohngemeinschaft）の混住寮をイメージとして持っていたが、ハウスシェア型に馴染みのない日本においても東北公益文科大学の実践例があることを知り、同大学を訪れ、入居学生たちへのヒヤリングを行った結果、金沢大学においても、留学生との交流・協働のためにはハウスシェア型の混住寮がよいとの感触を強めた。

ところで、同ワーキングチームでは報告書を策定するにあたって、学生寮に居住する日本人学生および国際交流会館に居住する留学生にアンケートを行った。しかし、設置形態に関しては、ハウスシェアになじみのない特に日本人学生においては、「完全個室型」を希望する学生が予想通り大多数を占め、宿舎費に関しても、寮費が 700 円（国際交流会館は当時 5,900 円、現在は「先魁」と同じ）とそもそも出発点が非現実的であったため、半数近くの学生が 10,000 円位以下を希望するなど、新寮の構想にあたってアンケート自体はさほど参考にはならなかった。

これと並行して、論者たちは日本人学生と留学生の混住ハウスシェアの実践を行い、ユニットにおける共同生活や管理の在り方についてのノウハウを得ることにした。すなわち、2009 年 10 月から男子用女子用各一軒ずつのシェアハウスを設置した（一般住宅を賃貸）。特に男子用のシェアハウスは、一般社団法人「金澤町家ドミトリ推進機構」と連携して行ったプロジェクト事業であり、町家を保存・維持するために町家をシェアハウスとして活用する試みとして NHK の全国ニュースで報じられるなど一定の反響を呼んだ。町家および一般住宅を利用した混住シェアハウスは最終的には 5 軒となった。

一方、2009 年度に男子寮 2 寮の耐震補強工事が行われることになり、学生寮の移転・新築は、留学生を主な対象とする学生用宿舎の新設という形に変更された。こうして、2008 年 12 月、財務担当理事を長とする「学寮構想委員会」が発足し、留学生用の宿舎の検討が本格化した。2009 年 5 月には、  
「1. 整備手法は民間資金の活用を前提として検討する。2. 場所は角間国際交流ゾーンとする。3. 規模は当面 300 人程度で計画する。4. 混住型とし比率は日本人 6 : 留学生 4 または日本人 5 : 留学生 5 とす

る。5. 単身棟の基本平面プランは小グループが共同生活をするハウスシェア型（ユニット型）とする。6. 維持管理は委託外注とする。」との基本方針が定められ、報告者を座長とする「学生支援施設検討ワーキンググループ」によって要求水準書が作成され、学内手続きを経て、2010年1月、事業者の公募となった。公募条件は、「300人規模、大学の負担金なし、BOT（Build



1号棟

Operate Transfer) 方式等」であった。その後、ハウスシェア型混住寮のノウハウが十分に蓄積されていないことなどを理由に、規模を100名程度に縮小して、同年10月に再公募が行われた。

公募に応じたのは3社であったが、そのうち2社がBOT方式ではなくBT0(Build Transfer Operate)方式を提案してきたため、学内で検討した結果BT0方式で行うこととした。一般的には、建築後すぐに施設を公共側に移転し、その後民間事業者が管理運営サービスを行うBT0方式は、施設所有に関するリスクが民間事業者にかからないので、施設の建築後、民間事業者が管理運営サービスを行い、資金回収を行った後公共側に施設を移管するBOT方式より、民間事業者には受け入れやすい。一方、公共側はBT0方式では施設の保有によるリスクを甘受しなくてはならないが、設定した収入（ここでは家賃収入）を超える収入が公共側の収益になる等の利点がある。いずれにせよ、2011年1月には学内諸委員会によって優先交渉権者を決定し、7月に事業契約の締結に至った。

ところで、角間キャンパス内に学生留学生宿舎が建てられるとの情報が伝わると、近隣から民業圧迫ではないかとの危惧が寄せられた。そこで、新宿舎はあくまでも留学生増大計画による留学生の純増分を吸収するものであるとの説明を行った。

## 2. 「先魁」の運用

「先魁」という名称は、創基150年（2012年）のキーコンセプト「先魁」「共存」「創造」から採られた（学内公募による）。現在、定員104名（8名ユニットが13棟）で、短期留学の留学生の男女比を考慮して、男子ユニット6（48名）、女子ユニット7（56名）である。欧米には男女混合のユニットもあるが、日本の一般的な感覚やムスリム等の文化的背景を考慮し、「先魁」においては全て男女別ユニットとなっ



居室

ている。寝室・勉強部屋は個室、その他の施設（シャワー2、トイレ 2、LDK）は共用である。ユニットは2階建てで、個室は1階に3室、2階に5室ある。ユニットの人数にはさまざまな議論があったが、経済性などを考慮して第I期では8名となった。

当初の検討では、入居比率を「日本人 6：留学生 4 または日本人 5：留学生 5 とする」とし

ていたが、規模が 300 名程度から 104 名に縮小されたので、最終的には日本人 2：留学生 6 となった（したがって、日本人 26 名、留学生 78 名）。現状では、公平性を図るため留学生の入居期限を 1 年以内としており、滞在期間が 1 年を超える留学生は、1 年後に自力で住居を探す必要がある。

一方、日本人学生は RA（Resident Adviser）との位置付けであり、同居の留学生をサポートする役割を担っている。彼ら・彼女らの入居期限は 1 年と限られていない。当初の検討では、諸大学の例にもならぬ、留学生も RA になることを想定していたが、現状では RA は全員日本人学生である。RA の多くは、留学生との交流や短期留学（派遣・交換留学）を志望する学生ないしは短期留学から戻ってきた学生である。特に短期留学から戻ってきた学生は、留学先で色々なサポートを受けた経験を有し、自らもそのようなサポートを逆に留学生たちにしたいとの強い意思のもと、日常のさまざまな問題に対応してくれている。派遣以前に留学指導をしていた学生と、帰国後、RA の選考面接で再会することは、報告者の大きな喜びである。RA の業務は基本的には、宿舎内における留学生の生活サポートであるが、現状としては本来チューター等が行うべき業務も善意から行っており、このあたりの線引きが今後の課題になっている。運用開始当時、RA も入居者も共同生活に慣れていなかったこともあり、さまざまな問題が発生したが、当時の RA たちは週に一回のミーティングを重ね、そうした問題を共有し、「先魁」の運営を軌道に乗せてくれた。彼ら・彼女らの努力を称えるとともに感謝を持ってここに記したい。

前述のように「先魁」の建物管理・宿舎費徴収は民間会社が担っているが、入居者の選定等は、「金沢大学学生留学生宿舎規程」に基づき、同規程が定める「管理委員会」が行っている。管理人は、理想としては、英語能力のある人の常駐であるが、宿舎費を抑えるため、現状では入退去が集中する春秋の 2 カ月間のみ常駐、また英語に関しては非対応となっている。

現行の宿舎費は、21,440 円で、これに家具・家電・寝具のレンタル料、インターネット接続費等を加えると、26,624 円になる。光熱費は月 4,000 円を徴収し、半年ごとに清算する方式である。入居にあたっては、預託金と寝具のレンタル基本料を徴収し、預託金から、退去時の居室クリーニング代と光熱費の不足分を差し引くことになっている。宿舎費の徴収方法に関しては、学期ごと・月割り・日



リビング

割り等さまざまな方法がありえるが、現在では日割り計算を行っている（運用開始当初は月割計算）。新規の入居者には、「金沢大学学生留学生宿舎先魁入居案内」および「学生留学生宿舎先魁生活ガイドブック」が配付される。これには利用の諸条件（退去届や一時帰国の手続き含む）、宿舎内での生活の仕方・ルール（ごみの分別等）、宿舎内の設備の使用方法、近隣の生活情報、病気や火事の際の対処の仕方などが日英二か国語で記載されている。また、入居時 RA によってオリエンテーションがなされている。

3・11 以後、特に防災に関する対応策が重視されているが、「先魁」においても防災訓練・避難訓練がなされている。

なお、入居者ならびに他の学生との交流のために、学内交流団体や RA 等によって、さまざまな交流会が開催されている（許可制）。また、交流ホールを日常的に音楽の練習や歓談のために利用している学生もいるようである。



交流ホール棟

## おわりに

以上のように、「先魁」は金沢大学の国際化・交流を促進する教育寮として運営しているが、当然ながら解決すべきさまざまな問題がある。以下、そうした課題について述べ、この報告を終わりたい。

本学では、希望する留学生にチューターを付け、学習や日常生活上のサポートを行っているが、前述のように、このチューターと「先魁」RA の業務の住み分け・明確化が課題である。また、宿舎ごとの RA の業務のすり合わせも重要である。住む宿舎によって RA の対応が食い違っているとどうしてもトラブルのもとになってしまう。また、サポートを行うときも、出身国・文化背景によって要求度がかなり違うことを認識しなくてはならない。特に、RA の過大なサポートを前提としたり、あるいは依存的になってしまわないような工夫が必要である。そのためにもサポートに関してはマニュアル化を図り、また入居時に十分に説明する必要がある。現在の「先魁」では、留学生 6 名に対し日本人 RA2 名の割合なので、RA の負担が過重になる場合もある。今後は、第Ⅱ期計画を進め、宿舎規模を拡大することで、日本人学生の割合をなるべく 1 対 1 に近づけていきたい。

現在、「先魁」の入居者の出身国は 19 カ国・地域であり、まさに多様な生活習慣・価値観の学生たちが共同生活を行っている。また、留学生が参加しているプログラムも正規の課程から短期留学プログラムと多様である。したがって、生活リズムや学習に対する姿勢も人それぞれである。そうしたなか、騒音や生活習慣の違いからくるさまざまな問題が発生することは容易に想像できる。しかし、「先魁」は全てが配慮され何も問題の生じない「予定調和」の世界ではなく、むしろ協働で問題解決をす

る場、異なった文化や生活習慣が混在する多文化共生実践の場であってほしい。

BT0方式で管理・運営されている「先魁」は、一定の入居率を採算ラインとしている。宿舎規模が大きい場合、入居期間を短く限定しないことで、この入居率を高い水準で維持することが可能である。今後は、入居率を高い水準で維持するためにも第Ⅱ期計画を進め、入居者のスケールを大きくすることで高い入居率を維持する必要がある。その意味でもスーパーグローバル大学に採択された本学が「本学の国際化・グローバル化に応じ、留学生及び外国人研究者の宿舎を整備」(YAMAZAKIプラン 2014<sup>1</sup>)することを全学の方針としていることは嬉しい限りである。いずれにせよ、教育目標や留学生および日本人学生の学習・生活ニーズに基づき、ハウスシェア型と個室型、あるいはパートナー・家族向け宿舎のベストミックスを勘案しながら、さらに拡大・展開することで、「先魁」が金沢大学、ひいてはわが国の国際化、留学生交流に貢献することを心から願っている。

---

<sup>1</sup> <http://www.kanazawa-u.ac.jp/university/management/plan>